

敦煌における9、10世紀の「印沙仏」儀礼の考察

徐 銘

A Study of Yinshafu Ceremonies in Dunhuang in the Ninth and Tenth Centuries

XU Ming

はじめに

- ①年初祈願行事としての「印沙仏」儀礼
- ②「印沙仏」儀礼における唐代芸能の特質
- ③「印沙仏」儀礼と先祖祭祀との関わり
おわりに

【論文要旨】

9、10世紀の敦煌資料には、宗教儀礼に関連する文書が多数見られるが、その中には、仏教信仰にもとづく、仏像や塔形を刻んだ印を砂の上に押印し、数珠で数を数える「印沙仏」と称される儀礼が存する。従来の研究では、この儀礼は敦煌仏教における重要な行事として認められ、正月に行われた仏事「燃燈会」との繋がりが注目され、研究されてきたが、ほかに、内容上、同時代に敦煌で行われた仏誕会などの儀礼との関わりも見落とすことができない。

「印沙仏」儀礼を執行する主体として注目されるのは「社」という組織である。「社」はそれ以前の土地神の崇拜によって形成された地縁的集団と異なり、仏教信仰で結ばれた組織である。庶民の集いとしての「社」と僧侶の組織である教団は、このような儀礼の催行を通じて密接な関係を築き上げていた。

「印沙仏」儀礼の目的としては、祓病除災、来世幸福などの個人の願いから、国家

太平や五穀豊穡に代表される祈りまで、さまざまな民衆の生活に結びついた祈願が多く見られ、当時の敦煌仏教の実践の一端を明確に見ることができる。こうした点に注目して、これまでの日本・中国のいずれの研究においても充分ではなかった敦煌仏教の社会的側面、及び地域の信仰との関わりを明らかにする考察として、本稿では「印沙仏」儀礼の実態を解明し、その特質を検討する。

「社」は、唐代中期から齋会などを扶助し、二月八日の仏祖誕生を祝う儀礼や民俗的行事にも関わったが、こうした検討を通じて、民衆の仏教の受容の実態を明らかにし、従来、十分な研究が行われてこなかった敦煌仏教の儀礼とその社会的側面を考察することが、本稿の目的である。

【キーワード】敦煌仏教、「印沙仏」儀礼、年初行事、芸能、先祖祭祀

はじめに

一九〇〇年ごろにより、敦煌地域において発見された文書資料には、宗教典籍が多数に存在しているが、そのうちにもっとも多かったのが仏教に関する文献である。これらの資料には、仏寺や仏教行事に関する資料が大量に存しているが、それらには寺院ないし僧侶、尼についての記述内容だけでなく、統治階級、信者をはじめとする一般社会の民衆との交渉の様相が記されており、歴史資料として注目されてきた。

そのうちには、寺院の日常支出が記された経済に関わる文書や、行像会や燃燈会といった年中行事、仏教儀礼に関わる資料があるが、いずれも民衆の社会生活と深く関わっていた仏教行事であった。その中に、本論文で考察の対象とする、右手に仏像や塔形を刻んだ印を持って砂の上に押印し、左手に数珠で数を数える「印沙仏」と称される儀礼がある。

「印沙仏」の儀礼作法については、最初に注目したのは一九六四年、日本の竺沙雅章氏である。竺沙氏は「印沙仏」儀礼を整理し、主に作法の中心となる内容を解説した。⁽¹⁾その後、一〇年以上を経て一九七八年に藤枝晃氏が新たに資料を発見し、木版刻の画との関わりを注目しながら、儀礼の称呼およびその行事内容についてのさらなる分析をした。⁽²⁾

また、フランスの研究者である侯錦郎氏が日本研究者による発見資料を補足し、かつそれらの資料を分類し、儀式の式日、場所や参加者などについて分析した。⁽³⁾一九八九年に、中国の研究者である譚蟬雪氏はさらなる大量の資料を補足し、儀式の進行を論じながら、儀礼の変遷および本儀礼と関連すると推測される洞窟や遺跡などをも調査した。⁽⁴⁾最新の研究では、新たな関係資料を整理・分類し、また儀礼を行うための、寺院における経済的側面を注目した論文も見られる。⁽⁵⁾

このように、この行事は敦煌仏教における重要な儀礼として研究者の

間に知られるようになり、同じく正月に行われた仏事である燃燈会との関係性なども検討されてきた。本稿で論じるように「印沙仏」儀礼を考察する上で、他の儀礼との関わりも見落とすことができない。

「印沙仏」儀礼について、その執行主体から見ると、「社」という組織であったことがまず注目される。「社」は仏教信仰を中心とする組織であり、従来の土地神の崇拜によって形成された集団⁽⁶⁾とは異なっていた。当時の宗教者がいかに儀礼を実践していたかは、民衆と仏教の関わりを知る上でも重要である。また、祓病除災、来世幸福などの個人の祈願、あるいは国家太平のような国家的祈願など、さまざまな儀礼が行われていたことが知られ、それらと民衆の生活との結びつきや、関連性を説明することも、重要な課題となる。

本稿においては、「印沙仏」儀礼に関する主要な資料を取り上げて、同じく唐代中期から齋会などを扶助した社の集い⁽⁷⁾によって行われた先祖供養や二月八日の仏祖誕生を祝う儀礼とも比較、検討しつつ、仏教信仰を中心とした「社」という組織の下で社会生活を送った人々にとつての儀礼の役割を解明し、その特質について考察する。

①年初祈願行事としての「印沙仏」儀礼

「印沙仏」とは、河や川の辺、砂地の上に塔の形を呈する印を押印する儀礼である。⁽⁸⁾「印沙仏」儀礼を記す文献は儀礼の内容、実態だけでなく、彼らの集いの生活を具体的に知ることのできる資料として貴重である。敦煌資料にある「印沙仏」儀礼の文献は現在、次の二〇点が知られている。そのうち、年代判定ができない文献は七点があり、明確に年号を記した文献は三点があり、年代判定ができる文献は一〇点であるが、吐蕃統治時期に写された文献は一点が存する。以下に表にして整理した。

一覽して気がつくのは、開催日を新年、三春、上春などとする「印沙仏」儀礼が多いことで、この儀礼はまず年初の行事として行われていたことがわかる。そうした資料として、まず、次の資料を取り上げ、儀礼の具体的な様相を明らかにしてみたい。

	写本番号	題 目	年 代	備考, 式日等
年号記載あり	P.2237V	印沙佛文	天成五年	發露
	S.6417	印沙佛文	貞明六年庚辰歲二月十六日と同光清泰	上春之日
	P.2483	無	太平興國四年	
年代推定可	Φ 263V	無	五代	三春首朔, 四序初分
	Φ 362V	無	五代	三春首朔, 四序初分
	B.6851V	印佛文	五代	三春上律, 四序初分
	S.1441V	無	五代	
	S.6923V	無	五代・宋初期	新年首朔, 四序初分
	S.5593	無	五代・宋初期	上春之日
	P.3276V2	印沙佛文	五代・宋初期	新年
	P.3276V3	無	五代・宋初期	新歲
	P.3276V6	社齋文	五代・宋初期	春冬更改, 年歲相交
	P.2255V	無	吐蕃	秋季之中旬
年代推定不可	S.663	印沙佛文		三春上律, 四序初分
	S.664	無		
	S.4428	印沙佛文		三春上律, 四序初分
	S.5573	無		
	S.4458	無		齊年邑義諸社衆
	P.4012	無		佛日
	P.2443V	無		

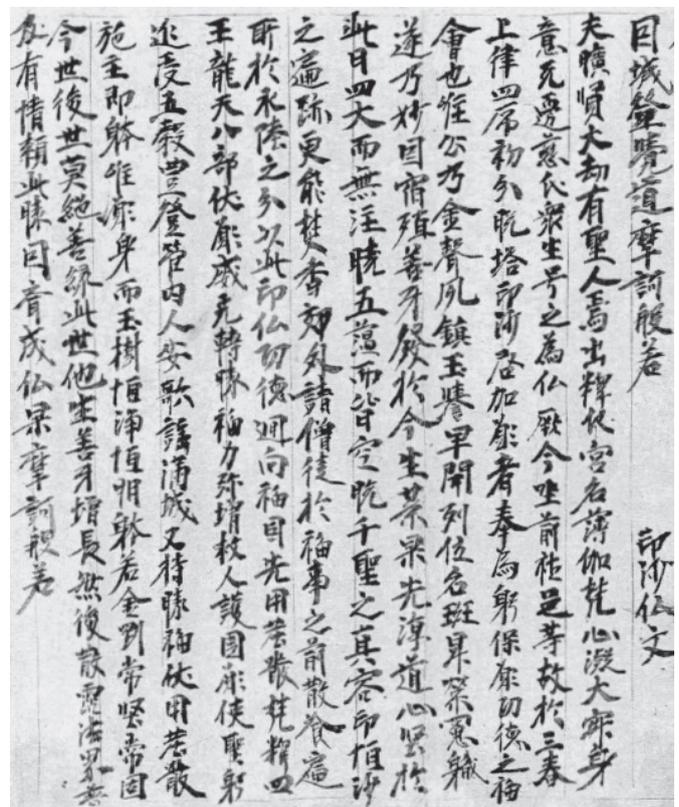


図1 資料1 大英図書館蔵 S.663『印沙佛文』⁽⁹⁾

資料1 大英図書館 S.663 『印沙佛文』(23行〜35行)

夫曠賢大劫、有聖人焉、出釋氏宮、名薄伽梵。心凝大寂、身意無邊。慈氏眾生、號之為佛。厥金座前社邑等、故於三春上律、四序初分、脫塔印沙。啟加願者奉為(己)躬保願功德之福會也。唯公乃金聲鳳鎮(振)、玉響早聞、列位名班、昇榮冕職。遂乃妙因宿殖、善芽發於今生。業果先淳、道心堅於此日。「知」四大而無注(住)、曉五蘊而皆空。脫千聖之真容、印恒沙之遍跡。更能焚香郊外、請僧徒於福事之前、散食遍所於水陸之分。以此印沙功德、迴向福因、先用莊嚴、梵釋四王、龍天八部。伏願威光轉勝、福力彌增、救人護國。願使聖躬延受(壽)、五穀豐登、管內人安、歌謠滿城。又持勝福、伏用莊嚴施主即體。惟願身而(如)玉樹、恒淨恒明。體若金剛、常堅常固。今世後世、善緣莫絕。此世他生、善芽增長。然後散霑法界、普及有情。賴此勝因、齊成佛果。摩訶般若。

前半の「厥金座前社邑等、故於三春上律、四序初分、脱塔印沙。」という句より、儀礼の執行主体は社であり、期日は初春、すなわち年初であることがわかる。この文の中に記された「脱千聖之真容、印恒沙之遍跡。」という句より、この儀礼が、砂の上に仏の像や、仏塔を押し印する印沙、脱塔という二つの作法から構成されていたことがわかる。また、これに続く「更能焚香郊外、請僧徒於福事之前、散食遍所於水陸之分。」の句は、こうした儀礼を行うにあたって、僧侶を招請して、水中や陸上の精霊に施餓鬼の作法として食を散ずることを僧侶に行ってもらっていることを述べている。文の結末に述べられる発願の部分を見ると、社の集団行事としての共同祈願として、五穀豊穡や国の安穩などが祈られている。一方、こうした「社」による行事ではなく、教団によって行われた「印沙仏」儀礼もあった。次の資料はその一例である。

資料2 フランス国立図書館P.2237V 「印沙佛文」(46行、58行)

印沙佛文：夫厥今此會、則有遺法弟子、法俗二流等、並虔誠徹禱、
布露覆心、稽首歸依十方世界。清淨法身、恒沙界中、分身化佛、大
悲三念四知、六通七寶馱都、遺身舍利、十二分教護。實所詮十地三
賢、四向四過、他心道眼、無漏流伏。何頼因弘誓乘、超果上悲、不
捨蒼生、垂哀護念、運神之力、證明功德。弟子等今此末法四流、像
學僧尼有限、無始流轉、往返三塗、迄至於今、煎迫不息、不知不覺、
明世周歸。今欲隔彼前非、發露懺悔。惟願法佛慈悲、受我稽請。惟
願真身化佛、常住世間。寶字金經、恒傳沙界。大悲菩薩、擁護道場。
小果聲聞住持、妙法天流、不捨慈悲。八部龍神、潛加護念。亦四王
八部、威轉光盛、福惠照彰。興運慈悲、救人護國。使干戈永息、寇
盜不興。天掃機槍、地清氣霧、國宗(家)萬歲、天下太平。兩國通
和、三邊永靜。四時順序、五稼豐登。災障不生、萬人安樂。然後土
通非(下闕)。

この文の内容から、社の組織によって運営された儀礼ではなく、僧俗の「弟子」といった個人により執行された儀礼であったことがわかる。文の冒頭には参列した主体が「法俗二流」であったことが述べられており、僧侶がすべての儀礼に参与していたことがわかる。また、発願の部分に「國宗(家)萬歲、天下太平。兩國通和、三邊永靜。四時順序、五稼豐登」とあり、国家太平や五穀豊穡といった祈願の趣旨が述べられている。

ところで、敦煌において春季の年中行事としての仏事としては、釈迦牟尼世尊の誕生した日とされた「二月八日」が行われていた。注目されるのは、本仏事と「印沙仏」儀礼との間には、仏事の趣旨や目的において共通点が多く見られる点である。このほかに、「印沙仏」儀礼について記した敦煌文献に、その後部に「二月八日文」が書かれる資料がいくつか存在する。そのうちより、敦煌文献に残される二月八日に関わる文献として比較的時代が古いと見られるフランス国立博物館P.3728の「二月八日」(8行、38行)を挙げて、検討する。

二月八日、贊普德道遺古今、德光海内、八表咸伏、四海無(事)、
揚釋教於國中、播真宗於城內、名僧間出、碩德拯生、英聲縱美於遐
荒、功名不墜於即日。者(這)則有我此卅僧統番(蕃)大德之謂矣。
唯大德門願望重、懿威豪華、脫榮貴而歸緇、拂囂塵而出俗、心融鬼
解、識達空苦、慈愍為懷、仁明作務、緝一卅之權要、使三寶之肅邑、
道俗咸頼於弘揚、庶品競忻於法化。今者、屬以留年媚景、仲序始春、
太子瑜城之辰、如來涅槃(槃)之月。□(於)□左迴開闢、右邊城池、
幡幢里野而翩翩、瑞像本□而岌岌。士女隘隨、緇素駢闐、追古聖之
貴蹤、訪先賢之舊轍、建斯大會、福慶難名。將願善被蒼生、次資家國、
亦有城隍長幼、道俗梨毗、各捨有限之資、共建無疆之福、將欲掃災
殃於域外、集勝福於域中。故得上下同忻、士女虎(互)肅。以供設供、

乃啟乃誠、能事可從、總申表慶。於是宏開法座、廣闢香筵。彌陀山高、名僧兩會、經梵廖亮、簫管啾留、幡花絲敷、爐煙鬱郁。是時也、風吟東郭、雲曠西郊。百草未青、三春已暖。總斯勝善、莊嚴我當今聖神贊□(普)；願雄益作鎮、宣惠化於三邊、壽永年長、□□雲於萬里。又持勝福莊嚴、僧統教授□□山河而永注、福□同江海而逾深、□□□□遐宣、弘持之心不歇、風光一裹、梵宇□□□□苦海之津良(梁)、為眾生之眼目。即有節□□已下諸英雄等：佐天離勿、助聖安人、福將山岳與齋高、壽等海泉而深遠。合城士女、咸沐浴宜、助供榮齋、同霑吉慶、然後國安人泰、遐肅遙寧、干戈不舉於塩場、五稼豐登於龔畝。

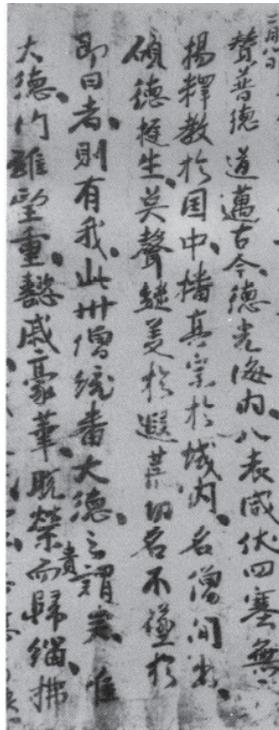


図2 フランス国立博物館蔵 P.3728「二月八日」⁽¹⁰⁾

「仲序始春」は資料1、2に取り上げた「印沙仏」儀礼の期日を表現する言葉と一致している。吐蕃の国王に対する「贊普」という呼び名からは、この資料は吐蕃統治時代に作られたものと考えられる。また、この文章の、「国安人泰」や「五稼豊登」という願望を表現する文辞も「印沙仏」儀礼の該当部分と類似する内容であると認められる。春季の「印沙仏」儀礼、年中行事としての二月八日の仏事ともに、年初にあたって、僧侶と民衆とともに実践された平和や豊穡への共同祈願といった点で共通する性格、特質を認めることができるのである。

②「印沙仏」儀礼における唐代芸能の特質

以上、現在に知られる二〇点の敦煌の「印沙仏」資料から、その催行時期がもつとも多い春季に行われた儀礼について考察してきた。「社」と「寺院」、僧侶により行われたことを確認した、その年の二月八日に開催した釈尊の誕生日を祝う行事にも、僧俗とともに国家や生活への祈願という点で、共通点が認められた。

ところで、釈迦誕生を祝する二月八日の仏事においては、仏教音楽などの芸能が行われた点に、儀礼としての特徴が認められるが、「印沙仏」儀礼においても、芸能が行われた例を見ることができる。

以下、芸能を含む「印沙仏」儀礼について、その実態を明らかにし、儀礼としての特徴を考察したい。

資料3 露科学院東方研究所 0263V+0362V (33行~43行)

厥今三春首朔、四序初分、就野外而印千尊、別溝渠而脱萬像。是以爐焚百寶、樂奏八音、散食四方、祈恩旋遶者云云。加以妙因宿植、善芽發於今生。業果先登、道心豎於此日。知四大而無主、五蘊而皆空。料體性而不堅、似電光而迷轉。昔聞童子聚砂上、有成佛之功能。懇仰鴻門、賴福因而籌筭。遂乃脱萬像之真容、印恒沙之遍跡。更能焚香郊外、請凡聖於福事之前。散食香餐、遍施於水陸之利。以斯脱佛功德、盡用莊嚴上界。

本資料によると、儀礼の実行期日はやはり初春であるが、「樂奏八音」という前節に取り上げた資料に見られない言葉が記されている点が目される。八音は当初、西周時代(紀元前一〇四六~紀元前七七一年)の頃に、中国においては楽器に対する総称で、八つの種類の楽器を表した。

古代中国では、楽器はその素材によって区分されており、すなわち金、石、糸、竹、匏、土、革、木の種類の素材から作られる楽器を意味した。また、八音とは、「如来八種音声」、すなわち如来の「不男音、不女音、不強音、不軟音、不清音、不濁音、不雄音、不雌音⁽¹¹⁾」という梵音を指す。仏教が中国に伝来した後、中国本来の発音と一つ一つ対応するようになった⁽¹²⁾。「梵音」は、仏事の時に、僧侶によって発される音声を意味し、したがって、以上より「樂奏八音」とは、仏教の仏徳を称える唱え言である梵唄に合わせて演じた芸能であったと推測される。

当時の仏教と芸能の関わりを記した資料として『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』⁽¹³⁾は、仏寺で行われた儀礼の全相を記載し、朝廷によって編纂された詳細な資料として知られているが、⁽¹⁴⁾仏教儀礼における、音楽芸能の重要性を窺うことができる。

(前略)夏四月八日、大帝書碑并匠鑄訖、將欲送寺、法師慚荷聖慈、不敢空然待送、乃率慈恩徒衆及京城僧尼、各營幢蓋、寶帳、幡花、共至芳林門迎。勅又遣大常九部樂、長安、萬年二縣音聲共送。幢最卑者上出雲霓、幡極短者猶摩霄漢、凡三百餘事、音聲車百餘乘。至七日冥集城西安福門街、其夜雨。八日、路不堪行、敕遣且停、仍迎法師入内。至十日、天景晴麗、敕遣依前陳設。十四日旦、方乃引發、幢幡等次第陳列、從芳林門至慈恩寺、三十里間爛然盈滿。帝登安福門樓望之甚悅、京都士女觀者百餘萬人。至十五日、度僧七人、設二千僧齋、陳九部樂等於佛殿前、日晚方散。至十六日、法師又與徒衆詣朝堂陳謝碑至寺、沙門玄奘等言。今月十四日、伏奉敕旨、送御書大慈恩寺碑、并設九部樂供養。(以下略)

本資料は、宮廷より贈られた石碑を供養する仏事で、宮廷によって遣わされた「九部樂」が供養を目的として仏殿の前で演奏されたこととわ

かる。「九部樂」とは、唐代、周辺諸国の音楽を取り込んで編成された九部からなる音楽のことで、唐とその周辺国の統合を音楽により表象した音楽形態、制度である。太宗貞觀年間には、さらに一〇部樂に拡充され、貞觀一六年(六四二)に初演された⁽¹⁶⁾。『大唐大慈恩寺三蔵法師傳』より、仏事において、この九部樂が奏されたことが知られ、唐の初期の仏教儀礼と芸能の融合状況を知ることができるのである。

「九部樂」は唐初期の高祖・太宗・高宗の三代にもっとも盛んに設けられ、寺院への賜樂としてもよく行われた⁽¹⁷⁾。唐王朝の初期に、道教の始祖である李耳である唐の統治者は、寺院においても宮廷音楽を演奏することによって、仏教信仰への親近感を表すとともに、仏教儀礼に王朝の統治色彩を加える目的であったことが推測される。一方、「印沙仏」儀礼における「八樂」はこの九部樂ほど規模が大きくなかったが、9、10世紀における政治の周辺地域、敦煌の仏教儀礼においても音楽が奏されていたことは注目される。

こうした「印沙仏」儀礼における音楽と類似した芸能の様相は、以下のような『二月八日文』の中にも見ることができる。

法王誕跡、託質深宮。是(示)滅雙林、廣理(利)郡(群)品。[二月八日文] 智覺騰芳、功勇齊者。大雄方便、動物斯均。王宮孕靈、寔有生於千界。逾城半夜、求無上之三身。今以三春中律、四序初分。柳絮南枝、水開北岸、遂乃梅花始笑、喜鵲欲巢。真俗旋城、幡花隘路。八音競奏、聲謠(遙)兜率之音。五樂瓊簫、響振精輪之界。總斯多善、莫限良緣、先用莊嚴梵釋四王、龍天八部。伏願威光盛運、救國護人。濟惠慈悲、年豐歲稔、伏持勝善。次用莊嚴我河西節度使尚書貴位。伏願五岳比壽、以日月而齊明。祿極蒼(滄)瀛、延麻姑之萬歲。然後休兵罷甲、鑄戟銷戈。萬里澄清、三邊晏靜。

大英圖書館藏 S1441 『擬』二月八日文(1行~9行)

本「二月八日」における、芸能として「八音競奏、聲謠（遙）兜率之音。五樂瓊簫、響振精輪之界。」と述べられており、「印沙仏」儀礼における芸能についての言辭とほぼ一致しており、仏教の声楽が奏されていたことが知られる。

この『二月八日文』のほかに、次の『二月八日逾城文』にも芸能に関する表現が見られる。

「二月八日逾城」[文] 夫能人善權、務濟群品。凡諸妙事、豈勝言哉。今則伴春如月、律中夾鍾（鐘）。暗魂上於一弦、莫芳（莢）生於八葉。後身逾城之月、前佛拔俗之晨（辰）。左豁星空、為（右）辟月殿。金容赫弈（奕）、猶聚日之影寶山。白毫光輝、為滿月之臨滄海。烏翳前引、睚眦而張拳。狡狴後行、備迅而矯尾。雲舒五彩、雨四花求（於）[四]衢。樂奏八音、歌九功于八胤。是日也、立烏至、鴻雁翔。翠色入於柳枝、紅蕊含於奈苑。總斯多善、先用奉資梵釋四王、龍天八部。惟願威光盛熾、神力無疆。擁護生靈、艾安邦國。又持勝福、次用莊嚴我當今天城（成）聖主賢位。伏願聖壽延昌、淳風永播。金轉（輪）與法輪齊持（轉）、佛日將於舜日交暉。妖氛肅清、保寧宗社。又持勝福、次用莊嚴我河西節度使貴位。伏願佐天利物、助聖安人。福將山岳與齊高、壽等海泉如深遠。又持勝福、次用莊嚴。伏惟使臣・僕射福同山岳、萬里無危。奉招（詔）安邦、再歸帝釋（室）。又持勝福、次用莊嚴則我河西都僧統・內僧統和尚等貴位。伏願長垂帝擇（澤）、為灌頂之國師。永鎮臺階、讚明王之利化。又持勝福、次用莊嚴都衙已下諸官吏等。伏願金柯蓋（益）茂、玉葉時芳。磐石增勳、維城作鎮。然後天下定、海內清。無聞徵戰之明（名）、有賴威雄之化。

フランス国立博物館 P.2058 『二月八日逾城文』（134行～150行）

（ここでは、「樂奏八音、歌九功于八胤。」という表現が見られ、八音の

ほかに、歌で九功を称える言辭も出てくる。「九功」は水、火、金、木、土、谷という自然事象、及び正徳、利用、厚生という社会事象を指す。⁽¹⁸⁾それは、資料の後部に多数の官職名にも密接に関わると考えられる。⁽¹⁹⁾実際に、仏教が中国本土に伝来した最初には、仏教経典を翻訳した際に、「五音」を使用して音楽を表現したが、社会生活における需要に応じて八音まで変容し、また歌謠等の芸能要素が増加してきたと推測されるのである。

以上、芸能が奏された「印沙仏」儀礼についてその実態を見てきたが、唐代には、法会など仏教行事が頻繁に行われるなど仏教が最盛期を迎えており、「印沙仏」儀礼のほかに、仏教儀礼においては曲調豊かな経、梵唄などが演じられ、多様多彩な音楽が演じられるようになっていた。⁽²⁰⁾ 仏教儀礼においては、特に音楽等、芸能の要素は、仏教が民衆に親しまれ、受容される背景としても重要であると考えられる。

③「印沙仏」儀礼と先祖祭祀との関わり

①では、「印沙仏」儀礼の執行期日に注目し、本儀礼が、年初の国家安穏や風雨順時の祈願を實踐する行事であったことを明かにした。しかしながら現在、確認されている二〇点のうちの一のみであるが、「印沙仏」儀礼が、年初以外に行われたと推察される資料が存する。それは、秋季に開催された「印沙仏」儀礼であるが、多くの、春季の五穀の予祝の願いに対して、先祖供養を目的として行われたものであることが、以下の内容よりわかる。

資料4 仏国立図書館 P.2256V 「印沙佛文」(32行～59行)

夫越愛何（河）、登彼岸者、其惟真智焉。示寶所滅化城者、其惟妙力矣。雖光宅大千、彌倫百億、四生咸度、萬徳皆圓、曾無所濟之功。是為能濟者也。厥此焚「寶」香、列珍饌、療佐肅肅、緇侶詠

読者、曰何謂歟。則我當今聖主展慶延(筵)、保願崇福之所施建。伏惟聖主覽圖握鏡、奉天順人、千聖重光、萬邦一統、加以首出群表、位當一人、雖富九年之儲、虛闕三豎之福。由是仰靈山而啟願、登鳳閣以宣威、百官頓首而從風、驛騎銜恩而出塞。使普天成熟於名(明)燈、轉金剛而祈勝福。率土敬陳於法供、會列無遮。冀千福慶於聖躬、萬善賴口於庶品。亦使峰(烽)颯不舉、萬里塵清。四鄰絕交諍之仇、兩國結舅生(甥)之好。我聖君之良願、其在茲焉。其有昌聖君之化、副明主之心者、則誰當之。有我皇太子殿下與良牧杜功爰須(及)節兒、蕃漢部落使等、皆風清臺閣、德映朝廷。我教授乃烏邁(澄)蘭、才當五百、並股肱王道、撫育黎黎、既奉論言、寧違安處。遂乃躬親出廓(郭)、印金相而脫沙。崇設無遮、陳百味之勝福。銀函闢經、轉(轉)萬卷而齊宣。寶樹魚燈、秉千光而合耀。勝福既備、能事咸享。謹於秋季之中旬、式建壇那之會。於是擊鴻鍾(鐘)、召青日、開寶帳、儼真儀、供列席而含芳、香爨而結霧。當時也、金風曳響、飄奈苑之疏條。玉露團珠、困禪庭之忍草。光翼翼、福穰穰、虛空有量、妙福長口、總用莊嚴我當今聖主。伏願開南山之初劫、作鎮「坤」儀。懸北極之樞星、繼明朝象。儲君願遐齡永固、妃后乃錦苑長榮。大論保富貴之「歡」、將師(帥)納無邊之慶。五穀豐稔、千廂善盈。寮佐穆如、居人樂業。龍天八部、翼贊邦家。釋梵四王、冥加福力。然後窮無窮之世界、盡無盡之倉生、並沐良因、咸登覺道。

本資料には、「謹於秋季之中旬」とあるように、秋の中旬に行われたことがわかる。また、本資料中の「無遮」の語は、仏の寛容を意味し、僧俗や生者、死者などの区別や制限がなく、「無遮大会」の仏事を行うことを意味している。⁽²⁾敦煌文獻には、「無遮大会」についての記録が多数存在している。

また、注目されるのは、文章の最初に「登彼岸者」という表現が見ら

れることである。彼岸に去ってゆく者とは、自分の先祖のことを指している。本資料中には、秋の収穫物による供え物を表現する「崇設無遮、陳百味之勝福」という句が見られるが、これは実際に、この儀礼において、秋の収穫物を並べて、豊穰に対する感謝を捧げるとともに、先祖にも捧げて冥福を祈ることを意味しており、これがこの儀礼の目的であったと考えられる。

ところで、中国は、仏教伝来以前より、先祖供養の儀礼が整備されていた。春秋戦国時代に編集された儒家十三経の一部である『儀礼』には「喪服」「士葬礼」等の節があり、『礼記』にも「喪服小記」「喪大記」「奔喪」「問喪」「喪服四製」等の作法を見ることが出来る。それらには、死から埋葬までと守服三年の間における各礼節が厳格に規定され、すでに整った祭祀儀礼として完成、実践されていたことがわかる。⁽²⁾

中国に仏教が伝来するのは1世紀ごろであるが、当初、僧侶は祭祀儀礼とは関わるべきではないとされていた。⁽²⁾ 仏教式の葬儀とは異なり、中国における先祖祭祀の儀礼は、「孝」を重んじる思想を背景として発達し、仏教が中国に浸透するようになってからも、長くこの伝統に基づいた祭祀儀礼が行われていたのである。

しかしながら、六朝時代後半頃には中国の孝の思想と結びついた仏教の盂蘭盆会、七七齋などの追福供養が行われ、仏教による祖霊祭祀が行われていた形跡が見られる。盂蘭盆会に関する最初の記載は梁朝・宗檀『荆楚歲時記』に見られ、その内容は以下のようである。

七月十五日、僧尼道俗悉營盆、供諸佛。按『盂蘭盆經』有二七叶功德、并幡花、歌鼓、果実送之。」盖由此也。

この資料により、中元節にあたって僧侶や道士、そして在俗者は共同で盂蘭盆会を行っていたこと、『盂蘭盆經』に記載された儀礼作法のとお

りに先祖供養が実践されていたことが知られる。

また、七七齋をめぐる道教経典『太上洞玄靈宝報因縁経』には、卷八「生神品第十九」のなかに、早くも六朝に、

若天命將終、天筭將尽、不可救拔、舍身太阴、臨終之時、為其
 発願懺悔、舍施衣服卧具、所有資財、受戒懺悔、最得功德、不可思
 議。即从初亡至七日以来、造经造像、設齋行道、礼誦懺悔、烧香燃
 灯、放生贖命、济度貧窮、昼夜相繼、開度亡人、克得生天。

という記載がみられる。それは、死後の七日から四十九日にかけて死者及び先祖に対して供養するための、さまざまな作法の実践について述べられている。

このように、中国の先祖祭祀儀礼は、徐々に仏教的儀礼への転換、あるいは付加させるかたちで発展したのであるが、庶民層の先祖祭祀の儀礼自体は基本的には伝統的な方法により行われていたものと考えられている。⁽²⁵⁾これらは、社の共同体で行なわれた儀礼や葬送儀礼は、仏教信仰が敦煌の人々の生活と密接に結びついていたことを示唆しているものと言えよう。

秋季に行われた「印沙仏」儀礼は、一年の豊穰を祝う行事として、仏に感謝を表すると同時に、その年の収穫物を先祖や死者へ捧げて、供養することを実践する行事として行われたことがわかる。

おわりに

シルクロードの通る敦煌は、歴史上商品を交わす交易都市としてよく知られているが、歴代の統治者は仏教を広く鼓吹して、宗教行事を盛んに行っていたことは、「印沙仏」儀礼を考えるうえで重要である。9、10

世紀の敦煌では、経済的にも、精神の面においても、民衆の社会生活は仏教と密接な関連性をもつようになっていた。仏教の活動は、社と寺院という二つの組織を柱として行われ、人々は生活を営んでいたのである。⁽²⁶⁾

本稿では、特に「印沙仏」儀礼を取り上げて、敦煌における仏教儀礼の実践様相の一例を考察した。「印沙仏」の儀礼作法は、社と寺院と深く関わったが、儀礼の主体はいずれも民衆であり、内容も仏教以外の信仰の要素を反映するところが多い。特に、「印沙仏」が、先祖や無縁仏、餓鬼供養としての水陸法会や無遮法会として行われたことは注目される。

「印沙仏」儀礼は敦煌において年初に、社会において重要な社の組織により、僧侶や民衆のみならず、社長、社官、録事によって構成される社の三官⁽²⁷⁾もこの儀式に参列し、社会生活の中、特に人々の信仰と関わって重視されたことがわかる。9、10世紀は、敦煌がおもに吐蕃支配時期および帰義軍統轄時期に入り、しばしば戦乱や戦争に巻き込まれる災難に遭遇した時代で、行事においては個人の祈福祓病や平安幸福を願うとともに、国家の平和、戦争の終結の祈りは切実な願いであった。

儀礼の様相に関しては、仏教儀礼は道教の儀礼、また中国の仏教導入以前の習俗と融合し、独自の儀礼作法が行われるようになっていた。たとえば、「七七齋」では、僧侶は齋主の邸宅を訪れて齋会を行っており、仏教は民衆の信仰を集めるようになっていった様子が窺われる。この時代は「俗講」と呼ばれる在家に説いて聞かせるための講経が流行していた時代でもあった。⁽²⁸⁾儀礼においては、民衆による供養、懺悔などの作法が行われた、写経、造像、供養疏文などの儀礼も次第に民衆へと広がり、難しい仏教教理は、儀礼を通じて民衆の社会生活と、願いにこたえるものになっていったことが知られる。

「印沙仏」儀礼の多くは、敦煌地域において、年初行事の一つとして春に行われた。その儀礼は、僧侶と民衆とがともに行い、儀礼を通じて、国家や個人の祈願を行うものであった。儀礼においては、仏教声楽のも

とに、宮廷の音楽をはじめとする芸能などの要素が取り入れられていた。またほかに、仏教伝来以前の中国の祭祀儀礼の性格を有する、先祖供養を目的とする「印沙仏」も行われていた。それは、敦煌地域における生活集団としての「社」と教団が、仏教と民衆の思想とを融合させる段階に入っていたものと見做される。

「印沙仏」は、仏教の中国化、民衆化の特質を有する代表的、典型的な儀礼と認めることができよう。

註

- (1) 竺沙雅章「敦煌出土「社」文書」(『東方学報』第三五冊、京都大学人文科学研究所、一九六四年、二六五―二六八頁)。
- (2) 藤枝晃「印佛・印沙佛―パリと奈良との仏教版画展から(上)・(中)・(下)」(『日本美術工芸』四八〇、四八一、四八二号、日本美術工芸社、一九七八年)。
- (3) 侯錦郎著、耿昇訳「敦煌写本中的「印沙佛」儀軌」(『法国敦煌学精粹』②)、甘肃人民出版社、二〇一一年、二四一―二六一頁)。原文は(『敦煌学論文集』第三卷、一九八四年)。
- (4) 譚蟬雪「印沙・脱佛・脱塔」(『敦煌研究』総第一八期、敦煌研究院、一九八九年、一九―二九頁)。
- (5) 王三慶、王雅儀「敦煌文献印沙佛文的整理研究」(『敦煌学』、南華大学敦煌学研究中心、二〇〇五年、四五―七四頁)。
- (6) 孝經、説く「社者土地之主。土地廣傳、不可偏靜。故封土以為社而祀之報功也。」周禮、説く「二十五家置一社。」(後漢・應劭「風俗通義」卷八「祀典」に記された社神に関する内容による)。
- (7) 那波利貞「仏教信仰に基きて組織せられたる中晩唐五代時代の社邑に就きて」(『唐代社会文化史研究』、創文社、一九七四年、六七〇―六七三頁)。
- (8) 季羨林主編「敦煌学大辞典」(上海辞書出版社、一九九八年)にある「印沙仏」条を参照。
- (9) 中国社会科学院歴史研究所・中国敦煌吐魯番学会敦煌古文献編輯委員会・英国国家図書館・倫敦大学東亞学院編「英藏敦煌文獻：漢文佛經以外部份」第二卷(四川人民出版社、一九九〇年、一一二頁)。
- (10) 法国国家図書館編「法國國家圖書館藏敦煌西域文獻」②⑦(上海古籍出版社、二〇〇二年、一五四頁)。
- (11) 『大正新脩大藏經』「法華部・華嚴部」第一〇卷「最勝問菩薩十住除垢斷結經」、

一〇二七頁b。また、「中阿含經」と「大毗婆沙論」には、八音が別の名称によって取り上げられる。

- (12) 李小栄「論「陀羅尼集經」中の清楽問題」(『法音』第一期(総第二〇九期)、二〇〇二年、三二頁)。
- (13) 『大正新脩大藏經』「大唐大慈恩寺三藏法師伝」史伝部第五〇卷、二六九頁a。
- (14) 荒見泰史「唐代仏教儀礼及其通俗化(上)」(『アジア社会文化研究』第一五号、アジア社会文化研究会、二〇一四年三月、二六―二七頁)。
- (15) 宋代以後の『歴代編年積氏通鑑卷』卷第八と『歴朝積氏資鑑』卷第六上はともに「大唐大慈恩寺三藏法師伝」のこの記載を引用している。その中で「敕太常九部樂」の部分は「敕太常九部樂并雜戲」に改められている。
- (16) 岸辺成雄「唐代音楽の歴史研究」下巻・楽制篇、第五章「十部伎」(東京大学出版会、一九六一年、一八八―一九〇頁)。
- (17) 岸辺成雄「唐代音楽の歴史研究」下巻・楽制篇、第五章「十部伎」(東京大学出版会、一九六一年、一九一頁)。
- (18) 『左伝・文公七年』には、「六府」と「三事」は、九功と称する。水、火、金、木、土、谷は「六府」と称する。正徳、利用、厚生は「三事」と称する。
- (19) 鄭玄注「九功はいわゆる九つの職である。」
- (20) 白延訳「佛説須頼經」(衆妓調五音、供佛当鮮明)。(『中華大藏經』第二〇冊、二八二頁)という。康僧鎧訳「無量寿經」卷上に「清風発時、出五音声。微妙宮商、自然相和。」(『大正新脩大藏經』第二二卷、二七一頁a)。真諦訳「立世阿毗曇論」卷二に「譬如五分音楽、如精妙楽師、五音繁奏、能起衆生五種欲心。」(『中華大藏經』第四九冊、二六五頁)。
- (21) 李小栄「敦煌佛教音楽文学研究」(福建人民出版社、二〇〇七年、六三―六三七頁)。
- (22) 湛如「敦煌仏教律儀制度研究」(中華書局、二〇〇三年、三四―三四七頁)。
- (23) 陸建松「魂帰何処―中国古代喪葬文化―」(四川人民出版社、一九九九年、五四頁)。
- (24) 西脇常記「中国古代社会における仏教の諸相」(知泉書館、二〇〇九年、特に「仏教徒の遺言」、二二―三三頁)。
- (25) 荒見泰史「敦煌の喪葬儀礼と唱導」(『敦煌写本研究年報』第六号、二〇一二年三月、一三一―一三六頁)。
- (26) 郝春文「隋唐五代宋初佛社與寺院的關係」(『敦煌学輯刊』、一九九〇年第一期)。寧可、郝春文「隋唐五代宋初傳統私社与寺院的關係」(『中国史研究』総五〇期、一九九一年)。
- (27) また、録事の代わりに社老を含む場合もある(竺沙雅章「敦煌出土「社」文書」『東方学報』第三五冊、京都大学人文科学研究所、一九六四年、二七一頁を参照)。

(28) 俗講と通俗講經に関しては以下のような研究がある。那波利貞「俗講と変文」(『仏教史学』二、三、四号、一九五〇年)。福井文雅「俗講の意味について」(『フィロソフィア』五三、一九六八年)。荒見泰史「九、十世紀の通俗講經和敦煌」(『敦煌変文写本的研究』、中華書局、二〇一〇年、二〇五―二二五頁)。また、俗講活動に関わる職人及びその次第に関しては、以下のような研究がある。鄭阿財「敦煌講經活動都講職司與文献遺存考論」(『敦煌仏教文献與文学研究』、上海古籍出版社、二〇一一年、一八〇―二一六頁)。拙稿「敦煌讀文類小考」(『敦煌写本研究年報』第七号、二〇一三年、三三三―三四六頁)。

(明海大学非常勤講師、国立歴史民俗博物館特別共同利用研究員)

(二〇一五年一月二六日受付、二〇一五年五月二五日審査終了)

A Study of *Yinshafo* Ceremonies in Dunhuang in the Ninth and Tenth Centuries

XU Ming

Many Dunhuang documents produced in the ninth and tenth centuries referred to religious observances, including a Buddhist ceremony called *yinshafo* (印沙佛) in which a seal engraved with the image of a Buddhist deity or stūpa was put on the sand and prayers were counted on Buddhist rosaries. This ceremony has been studied extensively as an important event in Dunhuang Buddhism. These previous studies have mainly focused on the connection of the ceremony with the Lantern Festival, a Buddhist ritual held in the first lunar month; however, it is also worth examining the relationships with other Buddhist rituals held in Dunhuang in that period, such as the Buddha's Birthday Festival.

Another point that cannot be overlooked in relation to the *yinshafo* ceremony is an association called the *she* (社). It was one of the key players in organizing the ceremony. This type of association was unique in that it was based on the religious bond of Buddhism, unlike other contemporary organizations which were based on a shared territorial bond formed from the worship of local deities. *She*, associations of commoners, built close relationships with religious groups of monks through working together to organize religious ceremonies.

One of the main purposes of *yinshafo* ceremonies was to pray for people's lives. The prayers ranged from communal to private, such as universal peace, a huge harvest, recovery from illness, protection from misfortunes, and happiness in the next world. These diverse prayers clearly show some aspects of Dunhuang Buddhism at that time. From this perspective, the present article examines the social aspects of Dunhuang Buddhism and its relationships with other local worship and belief, which so far have not been fully studied in either China or Japan, to reveal the realities of *yinshafo* ceremonies and analyze their features.

In the mid-Tang period, *she* associations supported fasting ceremonies and were involved in the festival to celebrate Buddha's Birthday on the eighth day of the second month of the Indian calendar as well as other folk rituals. These facts are examined in this article to analyze the acceptance of Buddhism among the people and the ceremonies and social aspects of Dunhuang Buddhism, which have not been fully studied until now.

Key words: Dunhuang Buddhism, *yinshafo* ceremony, New Year events, performing arts, ancestor worship ceremony
